

**令和5年度8020公募研究事業  
研究報告書抄録（採択番号 23-4-11）**

研究課題：欠損様式から部分床義歯補綴後の咀嚼能の向上を予測する

研究者名：水頭英樹<sup>1)</sup>、奥 由里<sup>2)</sup>、藤本けい子<sup>2)</sup>、永尾 寛<sup>2)</sup>

所 属：1) 徳島大学大学院医歯薬学研究部歯科放射線学分野

2) 徳島大学大学院医歯薬学研究部口腔顎顔面補綴学分野

【目的】8020運動はその受け入れやすいスローガンにより高齢者の残存歯数の増加に寄与してきた。咀嚼機能を評価する場合に「機能歯数」や「咬合支持歯（数）」は非常に重要であるため1本でも歯を残すことは歯科医師として重要な役割である。しかし、多くの高齢者では可撤性義歯、ブリッジ、インプラントなどの補綴装置を使用しており、多くの高齢者では咀嚼時に「天然歯と天然歯」「天然歯と人工歯」「人工歯と人工歯」の組み合わせにより咀嚼している。そこで、本研究では可撤性義歯に焦点を当て、様々な欠損様式に対して可撤性義歯により補綴した高齢患者の咀嚼機能を測定し、可撤性義歯を装着した場合と義歯を外して天然歯のみの場合とを比較してどの程度機能が向上するかを明らかにすることによって、臨床現場において患者さんに可撤性義歯の装着が咀嚼機能に与える有効性を提示することを目的とする。

【方法】被験者は、2023年11月から2024年3月までの期間に、メンテナンスで徳島大学歯科外来を受診した患者のうち、Eichner分類Bで部分床義歯を使用中で本研究に協力可能であった計10人（男性2名、女性8名、平均年齢75.7±5.2歳）を対象とした。咀嚼能力（咀嚼機能検査装置：グルコセンサー：ジーシー社）および咬合力検査（デンタルプレスケールⅡ：ジーシー社）使用し、義歯装着状態と非装着状態で測定し比較した。

【結果】義歯装着による咬合力増減率（平均92.7%）と咀嚼能力増減率（平均23.0%）との間に相関は見られなかった。また、天然歯咬合支持数と咬合力増減率では、有意な関係は見られなかったが、天然歯咬合支持数が多い程、咬合力増減率は減少する傾向がみられた。一方で天然歯咬合支持数と咀嚼能力増減率の間では有意な相関や特定の傾向は見られなかった。また、人工歯咬合支持数と咬合力増減率・咀嚼能力増減率の間には相関や特定の傾向は見られなかった。

【考察】咀嚼能力は単に機能歯数や咬合支持数の増加のみで向上するものではない。咀嚼時には舌や咀嚼筋など口腔周囲筋が協調している。義歯装着することにより咬合が安定し咬合力は増加することが推測されるが、咀嚼能力は咀嚼時の各患者の口腔周囲筋や舌の巧緻性や義歯への慣れなどが大きく影響するものと考えられるため、義歯装着患者には咀嚼指導を合わせて行う必要が示唆された。今後、症例数を増加させていくとともに、咀嚼指導の有効性や義歯装着時と半年後などの縦断研究を進めることによって義歯装着による咀嚼能力向上率が明らかになると考える。